

句集

風紋

高橋和女

風紋の

音なく流る

帰燕かな

あの流れるような砂上の
紋様は、自然の持つ優し
さと厳しさの刻印と言っ
て良い。

和女句集の題名にふさわ
しい言葉だ。

安立公彦

(二巻より)

祠なる深き闇より梅香る

蓬摘む遠き記憶の水車小屋

花の影逢うて昔の戻りけり

上り框高き生家や蚊遣香

戦没の兄

花影や逝きたる君の老ゆるなし

戦没の兄の忌日は春とのみ

戦の愚語り継ぐべし虫の夜

人声を溜めて重たき夕牡丹

春秋の喉見せて蹄く羊かな

母逝きて身の秋に打つ句読点

書き込み多き亡母の聖書や冬灯

遺されし母の扇子に母の風

海苔焙る律儀な夫の三日かな

松の芯叙勲の夫を眩しめる

「裁くものは我」声のかなたの春の闇

空港反対派に家を焼かれる

鱈酒や夫の十八番の歌「昂」

夫に謂ふ

いふなれば君は桔梗吾は風

身に入むや辰雄旧居の椅子二脚

歡びを分つ夫ゐて花種時く

花仰ぐ面影を：身に添はせつつ

露燐々ピエタの泪地に満てり

秋風や遺影に聴かすローリング・ストーンズ

母の日や亡き子に手向く貴腐ワイン

カールヴツセの空を見てきし奴胤

反射鏡春のニンフを舞はせけり

モナリザの笑みを湛へし古雛

子の忌来るダチユラ半旗を掲げけり

婚の日や花鳥かろき枝移り

万緑や花嫁の父腕をくむ

薫風や嬰の眸にやどる新世紀

秋扇に師の墨痕の平家琵琶

白日傘真砂女の路地を曲りけり

橋懸りに待つ人のあり天の河

アイガー北壁天を切り裂く良夜かな

終章は神の掌にあり冬夕焼

風紋の音なく流る帰燕かな

灯台は白き女身や風光る

今日のごと明日あらばよし風薫る

殉ずると言ふは美し流し雛

過去といふ確かなるもの広島忌

戦後長し生かされ仰ぐ良夜かな

障子貼つて夕日の影のやはらかし

毛糸編む手を止め夫の寝息きく

埋み火を消すなど夢に亡き子かな

綾絹で拭くみほとけや年惜しむ

初鶏や紫煙灰かに峡一戸

女振り上つたつもり春帽子

春愁の半旗や仏蘭西大使館

明日逢ふと衣桁に掛けし花衣

花影やゆつくり進む車椅子

著者略歴

高橋和女（たかはし・かずじょ）本名和子

1930年 鳥取に生まる

1951年（旧制）青山学院女子専門学校 国文科卒業

1985年 「春燈」に入会。安住敦・成瀬櫻桃子・鈴木菜子・安立公彦先生に師事

1995年 「春燈」燈下集（同人）に入集

俳人協会会員

春燈叢書第187篇

句集 ふうもん 風紋

2017年7月28日 初版

定 価：本体2800円（税別）

著 者 高橋 和女

発行者 奥田 洋子

発行所 ほんあま 本阿弥書店

東京都千代田区猿樂町2-1-8 三恵ビル 〒101-0064

電話 03(3294)7068(代) 振替 00100-5-164430

印刷・製本 日本ハイコム株式会社

© Takahashi Kazujyo 2017 ISBN978-4-7768-1272-2 (2990)

Printed in Japan